

機関番号：14401

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007 ～ 2010

課題番号：19520220

研究課題名 (和文) 多言語地域における文化資源蓄積の比較研究

研究課題名 (英文) Comparative Study of Cultural Resource Storage  
in Multilingual Areas研究代表者 三谷 研爾 (MITANI KENJI)  
大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：80200046

研究成果の概要 (和文)：この研究は、歴史的に多言語地域だったボヘミアおよびシレジアについて、そこでの複数文化共生の伝統がどのようにして学術研究の対象となってきたか、さらに蓄積された学術情報がどのようにして文化資源に転換され、実際に社会的に活用されているかを考察するものである。人文学的な研究活動とその成果利用の循環が、それぞれの地域の政治的・社会的条件に規定されながらおこなわれていることが、事例に即して検証された。

研究成果の概要 (英文)：This research project aims to analyze the problem, how the traditions of multicultural symbiosis in Bohemia and Silesia, historically typical areas of multilingual situations in Central Europe, have been discusses as an academic theme, and also the way, in which the obtained achievements have been converted to cultural resources for public use. The conducted case studies demonstrate that the circulation system of research activities and their utilization in humanities there must be determined by the political and social conditions of each region.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：多言語地域、文化資源蓄積、ボヘミア、シレジア、博物館、展示、視覚化

## 1. 研究開始当初の背景

1990 年以降に活発化した国民国家批判や国民文化批判をつうじて、文化的な移動・越境現象に注目が集まり、それらを包含する社会

空間としての多言語地域は大きくクローズアップされた。こうした地域についての学術情報を蓄積する過程じたい、当該地域をめぐる政治的・社会的なコンテクストに深く規定

されている。同時に、主として研究文献として蓄積された学術情報は、博物館や文書館といった制度、あるいは展覧会や図録や写真集といった視覚メディアを介して、社会に接続可能な文化資源に変換され、さらなら学知の集積に道を開くという循環システムが想定される。ボヘミアとシレジアは、歴史的にみればドイツ語とチェコ語、あるいはドイツ語とポーランド語が混在した多言語地域であり、それゆえにナショナルな対立が現在にまで影を落としている場所である。この両地域における、多言語的な社会環境そのものについての研究の生成、およびその文化資源化の状況をともに視野に収め、人文学の営為がそのつどの社会的・文化的コンテキストに規定されながら、新しい局面を開拓してきた経過を、事例研究として記述することを構想した。

## 2. 研究の目的

本研究は、ボヘミアとシレジアというふたつの多言語地域の文化環境にかんする学知の集積状況そのものに注目し、そうした歴史的展開を冷戦期、さらには1990年代以降の中欧地域の政治的・社会的なコンテキストに照らしながら、比較検討をおこなうことを目的とする。そのさいとりわけ、専門家による文献的研究が、博物館や文書館や展覧会などおもに空間メディアによって視覚化され、社会（公衆）へ接続可能な文化資源へと変換されている現状の検証をすすめる。また、両地域における状況を比較対照することによって、ドイツ・チェコ関係およびドイツ・ポーランド関係という、それぞれ固有の歴史的条件下に規定される差異の側面を確認するとともに、中欧の多言語地域に共通する問題の位相を明らかにする。以上により、多言語地域研究に関する学術情報が文化資源へと転換・活用され、それがさらなる学知蓄積へと結びついていくプロセスを解明する。

## 3. 研究の方法

ボヘミアについては研究代表者である三谷が分担し、多言語文化的な地域特性に光を当てた文学作品、文学史・文化史記述、およびそれらが視覚メディアを介して文化資源化される経過を、具体的な事例に即して内在的に考察する。シレジアについては、研究協力者である吉田耕太郎が分担し、主として博物館や文書館などの空間メディアを介した文化資源蓄積の実態とその社会的意味を検証する。なお、ボヘミアに関してはプラハに研究対象を限定し、かつ博物館等の常設的な施設はまだ未整備であるところから文献調査を中心とする。他方、シレジアに関しては、文献資料の内容が、第二次世界大戦後におけ

る同地域からのドイツ人追放に偏っているため、むしろ博物館等の施設を中心的な対象に実地調査をおこなう。

とはいえ、いずれの場合も、文献の調査・分析により、多言語的な文化伝統がいかにかに記述され、学知として定着されてきたかを、ディスクール分析によって明らかにするとともに、実地の調査・インタビューなどにより、関連する博物館や文書館のコンセプトや設置背景、およびその運営実態を再構成する。以上の作業により、学知の集積とその文化資源としての活用場面をトータルに検討する。

## 4. 研究成果

(1) ボヘミア、ことにプラハにおけるドイツ／チェコの多民族・多言語環境の本格的な学術研究が始まるのは、1960年代半ばである。エドアルト・ゴルトシュシュカーの提唱した〈プラハのドイツ語文学〉の研究プログラムは、当時の東側ブロック内の文化政策をめぐる情勢と深くかかわっており、そのためチェコスロヴァキア国内では民主化運動「プラハの春」の挫折とともに研究が停滞した。しかし、西側においてはこの研究プログラムの展開・検証がすすみ、その蓄積は1990年代初頭の東側の体制転換に前後して、大量に公刊されていくことになる。こうした学術動向と軌を一にして、プラハではかつての多言語環境に光を当てる専門出版社ヴィタリス Vitaris が各種ドイツ語書籍の再刊を開始し、他方そのチェコ語訳も出版されるなどの事業がすすめられた。また、プラハで組織されたカフカ協会も各種の講演会や展覧会を企画するとともに、フランツ・カフカ賞およびマックス・プロート賞を制定し、多言語・多民族的環境の現代的な評価に努めている。

(2) 〈プラハのドイツ語文学〉の学知の文化史資源化と活用は、カフカ文学の全世界的流行と連動して、比較的早期から始まっていたことが確認された。

そのひとつは写真メディアで、そのもっとも早いものがエマニュエル・フリントとヤン・ルカスによる写真集『フランツ・カフカはプラハに生きていた』である。同書は、写真メディアと言語メディアの融合という点できわめて先進的な試みであり、クラウド・ヴァーゲンバハやハルトムート・ビンダーによる実証主義的な画像資料発掘とは次元を異にし、むしろ文学作品の映画化さらには美術と連携したインスタレーション化を先取りしている。

他方、学知が展示会という空間メディアに転換されたもっとも重要な事例は、1995年おこなわれた「プラハのドイツ文学」展である。これは主催のベルリン文学館での調査によ

り、ボヘミア出身のドイツ語作家のプロフィールを紹介することよりもむしろ、その出版の実際に光を当て、文学の流通場面を浮彫りにしたという点で、文化情報の社会への接続にきわめて意識的な、すぐれた取組みだったと評価できる。

(3) シレジアにおける多言語・多民族環境の文化資源化に関する、もっとも注目すべき機関として、2006年にドイツ/ポーランドの国境の都市ゲアリッツに開設されたシレジア博物館が挙げられる。この博物館は、それ以前からドイツ各地に存在していた、東プロイセンからの被追放民たちの運営する同郷会的な博物館・記念館的な施設とは一線を画しつつ、それらの旧来の施設が所蔵するさまざまな資料を将来的に一元化して管理・活用していくための新たな拠点施設という、相反する性格を与えられている。こうした両義的な位置づけゆえに、シレジア博物館の存在にたいに疑念や批判が呈されることも少なくない。実地調査および聞き取り調査から明らかになったのは、こうした両義性を整合的に維持するために同館が、シレジア地域の文化的複合性を前面に押し出して、積極的に評価・発信することで、国境問題や住民追放問題というドイツ/ポーランド間の政治的軋轢を緩和するという方向を指向している現状である。

(4) ボヘミアとシレジアの両地域における、かつての多言語的環境の文化資源としての蓄積と活用は、第二次世界大戦後のドイツ/チェコ関係およびドイツ/ポーランド関係との緊密な相関のうちにあることが、あらためて具体的に確認された。チェコの場合、多言語的な文化共生の伝統の文化資源化がすすんでいるのはプラハについてである。その主たる担い手だったユダヤ系知識人がチェコ語文化とドイツ語文化の相互理解に積極的に寄与したことも、そうした伝統再発見の大きなプッシュ要因となった。これにたいし、シレジアの場合、ポーランド独立後もドイツに領有されたうえドイツ系住民の優位が強まり、かつ第二次世界大戦後のオーデル=ナイセ線策定にともなうドイツ系住民追放の結果、多言語的な文化共生の伝統の再発見はずっと遅れることになった。同じ中欧に位置しながらも、こうした政治的状況および住民感情の落差が、文化資源化の速度を第一義的に規定し、現在に至っていることが確認された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 三谷研爾、「写真と文学受容-フリントノルカス『フランツ・カフカはプラハに生きていた』にみる相互メディア性」、オーストリア文学、27、2011、42-55、査読あり
- ② 吉田耕太郎、「文化空間としてのシレジア-シレジア博物館(ゲアリッツ)の紹介と問題点」、独文学報、26、2010、121-137、査読あり
- ③ 三谷研爾、「展示された文学史-プラハのドイツ語文学とそのベルリン展(1995)の射程」、待兼山論叢・文学篇、43、2009、1-20、査読なし
- ④ 三谷研爾、「不適應のトポグラフィ-カフカ『失踪者』における都市空間と物語」、「芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」研究報告書、2009、214-219、査読なし
- ⑤ 三谷研爾、「〈交通〉のユートピア-プロート『チェコ人の女中における越境と移動』」、東北ドイツ文学、50、2007、101-119、査読あり

〔学会発表〕(計3件)

- ① Kenji MITANI: Aesthetic Modernism in the Context of Urbanization. Prague German Language Writers out of the History of National Literature. In: International Workshop Osaka-Praha 2011: Between "National" and "Regional" Reorientation of the Studies on Japanese and Central European Cultures, 2011. 3. 21, Charels University Prague.
- ② 三谷研爾、「カフカにおける〈交通〉とアイデンティティ」、日本独文学会シンポジウム「プラハとダブリン-20世紀ヨーロッパ文学における2つのトポス」、2008. 10. 13、岡山大学
- ③ 三谷研爾、「都市空間と物語 カフカの『失踪者』をめぐって」、文学と環境フォーラム、2008. 3. 15、大阪大学

〔図書〕(計3件)

- ① 三谷研爾、『世紀転換期のプラハ モダン都市の空間と文学的表象』、三元社、2010、330ページ
- ② 三谷研爾、『プラハとダブリン-20世紀ヨーロッパ文学における2つのトポス』、日本独文学会叢書、2009、33-45
- ③ 三谷研爾、『ドイツ文化史への招待 芸術と社会のあいだ』、大阪大学出版会、2007、181-199

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

三谷研爾 (MITANI KENJI)  
大阪大学・文学研究科・教授  
研究者番号：80200046

(2) 研究分担者

なし

(3) 研究協力者

吉田耕太郎 (YOSHIDA KOTARO)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：40551932